いしかり博物誌連載100回 特別企画

石狩を見つめて10年 ―いしかり博物誌―

今年で連載開始から10年目を迎える「いしかり博物誌」。
そのタイトルから浮かび上がるのは、文化や歴史、自然など表情豊かな石狩の姿です。

第1回　消えゆく5千年前の海岸線／第2回　市内で最も古くからヒトが住んだ場所～[illegible]回　江戸末期の石狩／新発見の「石狩河口図」を読む／第4回　発見された北海道最古の「河川遺[illegible]回　地下に眠る氷海の鯨／第6回　化石海水でいい湯だな／第7回　マイコレクション／第8回　古代人[illegible]第9回[illegible]狩の石油王をめざせ!?／第10回　日本書紀と石狩川／第11回　石狩をおおっていた海[illegible]夷地の関帝信仰／第13回　ビールもつくる珪藻土／第14回　姿を現した四千年前の[illegible]二つの鮫様／第16回　石狩から見える山／第17回　石狩でいちばん高い山／第[illegible]岸／第19回　火の用心のお札／第20回　石狩はどこで雨出す?／第21回　防風[illegible]第22回　石狩市で一番古い写真／第23回　手稲山が生んだ?紅葉山砂丘／第[illegible]第25回　風と砂に育まれた砂浜のトップランナー／第26回　5000年前!?のハマ[illegible]／第28回 冬の防風林～ドラミングが語る多様な生きものの世界～／第29回 石狩でいちばん寒い日／第30回　自然のタイムカプセル／第31回 春を待つ木々の花／冬芽の中から探してみよう／第32回　座礁したクジラたち／第33回　新たに見つかった[illegible]～49号人は海でも漁をして[illegible]第34回　虫たちのお食事[illegible]ムシはハマボウフウがお好[illegible]35回　パイナップ[illegible]／第36回[illegible]木々[illegible]る?[illegible]遺跡[illegible]最古の魚たた[illegible]津狩川の源流[illegible]井上伝蔵の句[illegible]らす野生動物たち～フィールドサインが教えてくれること～／第42回　石狩紅葉山49号遺跡を世界遺産に!　初めて分かった縄文の技術「柵」／第43回 生振捷水路、土木遺産に認定～近代治水思想のモニュメント～／第44回 知津狩川の最初の一滴／第45回 石狩空襲 今も残る戦争の傷跡

アゲハの長い眠り～／第47回　カナダ先住民のサケ・マス漁／第48回　ベルツの見た樺太アイヌ／100年ぶりに明らかになったベルツの樺太アイヌ調査／第49回　浜辺の頭蓋骨／第50回　落葉しないのはなぜ?～カシワの越冬作戦～／第51回　「いしかり博物誌」の博物誌／第52回　石狩から見えるいちばん高い山／第53回　黒く輝く石～黒曜石～／第54回　防風林に春告げる「ナツボウズ」／第55回　俳句ロードへどうぞ／第56回　謎の漂着物!?／第57回　チョウザメは、なぜ石狩に来たか／第58回　石狩の凱旋門／第59回　見捨てられた川／第60回　新しい鮭を迎える儀式／第61回　アキグミは晩秋のごちそう?／第62回　118年目の「石狩警察署」／第63回　石狩浜から世界が見える／第64回　石の恵比須様／第65回　風とともに生きる木々～子づくりは風が頼り～／第66回　村山家住居復元／第67回　石[illegible]狩の海の色／第68回　勾玉／第[illegible]9回　沼の魚たちはどこから来た

第70回　サケ皮の装い／第71回　化石のたまご／第72回　アオイカ[illegible]ぷかり／第73回　北のイタヤと南のカシワ～変化に富む石狩の海岸風景～／第74回　炎のかけら／第75[illegible]オイガイの正体見たり!／第76回　明治時代のチラシ広告―引札／第77回　国蝶オオムラサキが棲む森[illegible]故の短冊／第79回　琥珀の砂／第80回　親方が撮った漁場風景／第81回　不思議なお札[illegible]「オニハマダイコン」／第83回　石狩おばけ?―石狩湾の蜃気楼／第84回　漂着物の[illegible]はじまりはどこ?～望来・聚富の海岸植生観察～／第86回　長野商店の大看板／第[illegible]／第88回　求む!旧の出正宗のラベル／第89回　看板の履歴書／第90回　イカのカ[illegible]ベル／第92回 石狩観光のはじまり／第93回　銀貨と瑠璃、北海道初上陸／第94[illegible]サケ缶の食べ方／第96回　イルカの手／第97回　中世のサケ漁遺跡／第98回　石狩から見える山（絵画編）／第99回　イルカの足

問文化財課・いしかり砂丘の風資料館
☎62-3711
✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp
ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。

いしかり博物誌 100

いしかり博物誌 連載100回 特別企画

「いしかり博物誌」を振り返って

10年前、「いしかり博物誌」の連載がスタートしました。それから今日まで、石狩の自然や歴史―博物誌には、どのような変化や発見があったのでしょうか。

この10年の間、市内の3地点で遺跡の発掘調査を行いました。紅葉山49号、51号、52号遺跡です。これらの発掘調査で分かったのは、石狩のサケ漁は想像以上に古くに始まったということです。江戸時代からサケで栄えてきた石狩のまちですが、実はそのルーツは縄文時代の中ごろ、4000年前までさかのぼることが明らかになったのです。さらに昨年の発掘調査では、歴史の空白を埋めるように、江戸時代以前（16世紀ごろ）のサケ漁の跡も発見されました。

石狩の海では、人知れず大きな変化が起きました。これまでめったに見られなかった、アオイガイ（温暖な海に生息する殻を持つタコ）を始めとする南の海からやってきた漂着物の増加です。2005年～2007年が特に多かったのですが、2008年は再び少なくなり、アオイガイも過去3年の3割ほどしか見られませんでした。大気や海洋には10年～20年間隔で繰り返す変動があります。この10年で気候が次の局面に変化しようとしているのかもしれません。

石狩のまちにとっての最大の変化は、2005年の石狩市と厚田村、浜益村との合併でしょう。もちろんそれによってこれまでの歴史が書き換えられるわけではありません。しかしこれがきっかけで、地域の資料や古文書などが散逸・消失してしまう恐れもあります。これらは一度失われてしまったら、決して取り戻すことはできません。そんなことにならないために、今、厚田と浜益の文書や資料の整理を進めている最中です。

もうひとつ忘れてはならない変化があります。それは2004年、いしかり砂丘の風資料館のオープンです！　小さな博物館ですが、これまで99回書いてきたような石狩の博物誌について調べ、資料や標本を集め、大勢の人々に知ってもらい、未来に残す役割を担っています。この資料館の活動を通して、これからも石狩の博物誌に新たなページを増やし続けていきます。

（志賀健司）

「いしかり博物誌」のバックナンバーがホームページで読むことができます！

▼第1回～67回
http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/profile/bunkazaih00151.html

▼第68回～
広報いしかり平成17年8月号～
http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/publication/publication_top.html

※平成18・19年4月号にはありません
※平成19年7月号から隔月掲載です

作者たちが語る「いしかり博物誌」

連載100回目を記念して、今回はいしかり博物誌の作者たちにインタビュー！
連載にかける思いや裏話、さらには今後の展望についても語ってもらいました。

石狩紅葉山49号遺跡の柵の一部
➡**第47回『カナダ先住民のサケ・マス漁』**より

（写真右）明治10（1877）年に操業を始めた開拓使石狩缶詰所では主にサケの缶詰を製造。現在の金額で1個4,000円相当しました。
➡**第95回『サケ缶の食べ方』**より

―今回でついに連載100回目となりました！まずはこれまで書かれた中で、皆さんのお気に入りを教えてください。

石橋　私はカナダの先住民が使っていた道具と石狩紅葉山49号遺跡で見つかった道具がほぼうり二つだったことについて書いた**『カナダ先住民のサケ・マス漁』**（第47回）です。昔からサケやマスを食べる人が世界中にいて、さらに共通する技術で採っていたのは驚きでした。

工藤　私は**『サケ缶の食べ方』**（第95回）です。昔、欧米でサケの缶詰がたくさん売れたのですが、どうやって食べているのかと疑問に思っていまして。調べてみるとサラダなどにして食べていることが分かり、自分としても謎が解けて非常に面白かったですね。

志賀　僕は4つあります！　まずは石狩の海の色が2色に見える謎に迫った**『石狩の海の色』**（第67回）と、石狩浜に漂着したルリガイとギンカクラゲについて書いた**『銀貨と瑠璃、北海道初上陸』**（第93回）。どちらも簡単に調査できることを書いていて、誰でもやる気さえあれば、自然のことが分かるんだよということを知ってほしいと思って書きました。**『石狩はどこで雨出す？』**（第20回）と**『石狩でいちばん高い山』**（第17回）も気に入っています。

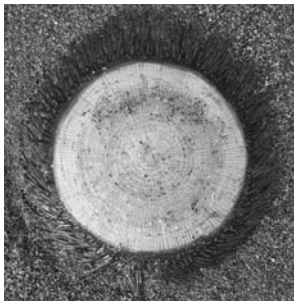
―ここまで続けるのにネタ探しなど苦労も多かったのでは？

石橋　ネタは豊富にあるので問題ありません。ただ、文字数に限りがあるので、分かりやすくまとめるのには苦労しますね（笑）。

志賀　確かに。専門的な話をどこまでかみ砕いて話すかは一番の悩みどころです。

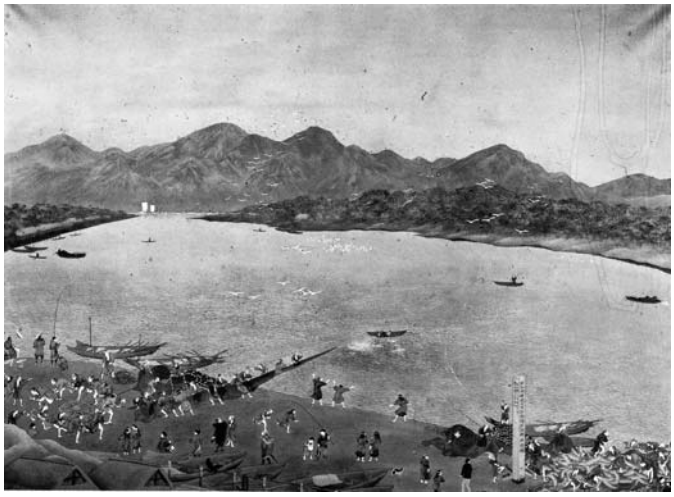
工藤　3人とも同じだと思いますが、ネタは素朴な疑問から広がっていくことが多いんです。すぐに答えられないものでも積み重なっていくうちに一つにつながったり、あるとき

石橋　孝夫 *Takao Ishibashi*
専門分野は考古学と石狩史。石狩市内の石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけ、以降は縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法と文化についても研究している。



平成19年9月下旬～10月下旬にかけて石狩浜に漂着した「ギンカクラゲ」。白い円盤の周囲と裏には青い触手がたくさん!

美しい瑠璃色の貝殻「ルリガイ」。平成19年10月に北海道初上陸!
➡写真はともに**第93回『銀貨と瑠璃、北海道初上陸』**より



『石狩鮭漁の図』（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター蔵）
➡**第98回『石狩から見える山（絵画編）』**より

にピンとひらめいたり。中にはいざ書き始めると思っていたほど面白く仕上がらなくてお蔵入りになった話もあったりしますけど（苦笑）。

石橋　書きかけの原稿は私もたくさんあります（笑）。

工藤　理想は、以前に志賀さんの**『石狩から見える山』**（第16回）に触発されて書いた**『石狩から見える山（絵画編）』**（第98回）のように、同じテーマをそれぞれの専門分野から書けるといいですよね。歴史や植生、地質などがうまくかみ合って続くと面白いと思うのですが、ローテーションやタイミング的なこともあって、なかなか難しいのが現状です。

―ところで考古学や地質学に興味を持ったきっかけは何だったんですか?

工藤　父親の影響が強いですね。考古学や郷土史に興味のある人で、小さいころから遺跡や史跡に連れて行ってもらったりしていました。

石橋　私も小さいころから興味があったんですね。幼稚園のころにアルタミラの洞窟壁画などが載っている絵本を買ってもらって、それを見て面白いなと思ったんです。考古学は誰も知らなかったものを発見し、文章にして伝える楽しさがあります。歴史のページをめくる醍醐（だいご）味は考古学の一番の面白さだと思います。

工藤　考古学は限られた手がかりの中で、どういうことが起こったのかを考える学問ですから、推理小説のような楽しさもありますよね。

志賀　僕が地質学に取り組むようになったのは大学からです。地層を調べていくと、地球がだんだんと寒くなったり、暑くなったりしたのではなく、もっと急激にダイナミックに変化してきたことが分かる。気候の変化には、大陸の移動や地球軌道の変化などの原因がある。そんなスケールの大きさに感動し、以降はどっぷりと地質学にハマっています。

―「いしかり博物誌」を通して伝えたいことは?

志賀　広報紙での連載は、博物館の教育普及活動として最も根底にあたるものだと考えていて、ここから郷土の歴史や文化などに興味を持ってもらえたらと願っています。

石橋　石狩は何万年もの歴史を持っていて、私たちはその時間の一番新しいところにいるわけです。自分の足元がどんな風になっているのかというのを、いろいろな角度から伝えていけるといいですね。

工藤　歴史や考古学、植生、地質などといった角度からみると、石狩にはまだまだ面白い魅力がたくさんありますから。そうした面をもっと伝えていきたいです。

志賀　健司 *Kenji Shiga*
専門分野は地質学・漂着物学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。

工藤　義衛 *Tomoe Kudo*
専門分野は考古学と風俗史。歴史・文化全般に造詣が深く、石狩独特の文化を研究する一環で石狩の食を代表する「石狩鍋」の歴史やルーツについても調査している。

3人のフィールドワークの拠点となる「いしかり砂丘の風資料館」前で。資料館は石狩川と日本海が出合うところに位置し、石狩の自然や歴史を訪ねるときの「入口」として、市民とともに博物館資料を集め、自然や歴史を調査研究し、展示も常に新しいものを目指しています。

所 弁天町30-4
時 9:30～17:00
休 火曜※祝日の場合は翌日
料 300円（中学生以下無料）
団体料金240円
問 ☎62-3711

志賀 ちょっと調べたり、見方を変えたりするだけでいろいろな発見があるんです。たとえば、温かい地域に生息するルリガイやギンカクラゲが石狩に漂着することからは地球上の海の変化が見えてきます。また、『**石狩でいちばん寒い日**』（第29回）でも触れたのですが、暖冬や寒冬をひもとくと、北極振動という地球規模の周期的な気候変動につながったりもします。石狩は古石狩湾もあれば、厚田に行くと二千万年も前の一段と古い海の話もあります。そうした海の変化や歴史を知るにも石狩はとてもよいフィールドだと思います。

石橋 そして、新しく住んだ人たちにも石狩という土地に馴染みを持ってもらえたらうれしいですね。

―今後書きたいと思っているテーマは何でしょうか？

石橋 今、厚田や浜益の資料を整理しているのですが、2つの地域にも本当に面白いことがたくさんあります。これまでは石狩が中心でしたが、厚田・浜益についてもどんどん書いていきたいですね。また、一般の方があまり目にする機会のない、大学などに所蔵されている資料についても、積極的に紹介できればと思っています。

工藤 僕は2年ほど前から、石狩のまちができてくる幕末から明治時代にかけての歴史の資料を調べているのですが、その中にある意外な歴史について書いてみたいですね。また、石狩に関する古い写真や絵もいろいろと集めているので、それらも紹介していきたいです。

志賀 僕が書かなくてはいけないと思っているのは、あらためて「石狩でいちばん高い山」についてです。今は浜益の群別（くんべつ）岳が一番高い山ですから、その話をぜひと思っています。また、以前書いた古石狩湾の海岸線やアオイガイの増加・減少の理由についてもさらに詳しく調べて進展を伝えていければと思っています。

―最後に皆さんが学芸員を務める「いしかり砂丘の風資料館」で「これは見てほしい！」というものをぜひ教えてください。

石橋 私はやはり石狩紅葉山49号遺跡で見つかったサケ漁の柵「エリ」ですね。発掘したものをそのまま展示していて、今も造園の仕事などに伝承されている縄の結び目をはじめ、技術的な部分も垣間見ることができます。

志賀 僕は入ってすぐにあるクジラの骨。ゾウやライオンなどは動物園で、イルカやシャチは水族館で見られますが、動物の中でもクジラだけは実物を見る機会はめったにないと思います。ここにあるのはほんの一部ですが、それだけでもいかに大きな動物かが想像できると思います。

工藤 石狩は歴史の古いまちで、昔はよかったとよく言われますが、残念ながら往時を伝える建築物は市内にあまり残っていません。その中で貴重な存在なのが平成19年に復元された資料館隣にある「旧長野商店」。中でもぜひ見てほしいのが壁に掛けられている八角時計で、これは必見です。当時、創業者の長野徳太郎さんがアメリカから購入したものでして、あの形がそのまま以降の日本の八角時計の原型になった非常に貴重な資料となっています。